



くすの木

春日部市立医療センターだより

発行
春日部市立医療センター
有馬 健
発行日
令和6年12月1日
編集
広報委員会
第118号



病院長就任にあたって

春日部市立医療センター 病院長
有馬 健



2024年4月に病院長を拝命しました有馬健と申します。当院は1958年2月に春日部市立病院として開設以来66年の歴史があり、「地域の皆さんに心ある医療を提供します」という理念の下に医療活動を行っております。現在では救急告示病院、基幹型臨床研修病院、地域がん診療連携拠点病院、第二種感染症指定医療機関、地域周産期母子医療センター、災害時連携病院などの指定を受け地域の中核的病院としての責務を担っております。このような重要な病院の病院長に就任し身の引き締まる思いです。



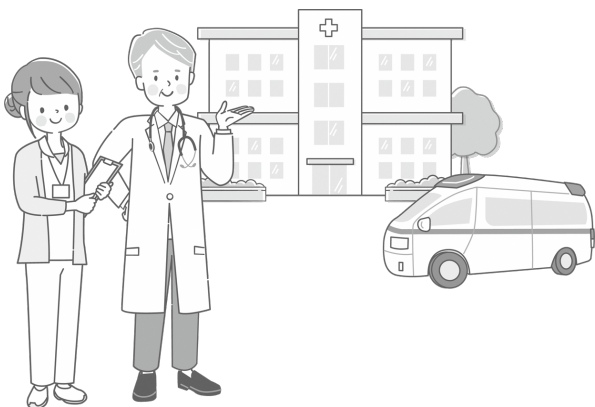
▲春日部市立医療センター



◀春日部市立病院

私は当院の前身である春日部市立病院に2000年4月に配属されましたので、今年で通算25年目の勤務になります。実はその当時春日部市立病院に心臓カテーテル室が出来上がったのに、立ち上げの責任者がなかなか決まらず、1か月前になって、急に私のところに何とかしてくれないかとの話が来ました。大学病院の救命センターの医長で三次救急を頑張っていたので、迷いもありましたが、高額な装置を導入したのに困っているのを見かねて来ることにしました。初めての出勤日に病院に行くと、始業前に院内職員の急変があ

り、誰も知らないスタッフの中でその対応の指揮を執るという刺激的な始まりになりました。また、初めて外来をやった日も最初に診た患者さんが急性心筋梗塞ですぐに外来を中断し心カテを行わなくてはならなくなったのも、今となっては思い出です。その当時救急に強いとは言えない病院でしたが、心カテ室を立ち上げるためにスタッフを教育し、経皮的心肺補助装置を使うような超重症患者まで一般病棟のハイケアユニットで管理を



行うようになりました。また、救急専門医でもありますので、救急医療の充実などにも努めてまいりました。そして、2011年3月の東日本大震災への対応、2016年7月の病院の新築移転、さらに2020年当初よりのコロナウイルスへの対応などを、病院全体で頑張っておりました。その間、2016年4月から副院長として、病院運営に関与してまいりました。また、移転当初開設できなかった、ICU・CCUはHCユニットとして2022年4月に利用開始しました。それを機に循環器救急の充実のため、365日循環器当直を置いています。

埼玉県の高齢化率は26.2% (2023年4月) と全国的には高いほうではありませんが、春日部市の高齢化率は30.8%(2022年10月) と全国平均を上回っており、医療ニーズは高まっています。一方、埼玉県は人口当たりの医師数が全国で最も少ない状態が長く続いており、医師の確保が重要な

課題となっています。当院も医師の確保には苦労しており、受け入れ制限をせざるを得ない診療科が存在しました。現在は派遣先の大学の協力や、当院で初期臨床研修した医師が戻ってきてくれることなどにより、少しずつ改善されつつあります。



当院ではロボット手術装置ダヴィンチを地域に先駆け導入し、泌尿器領域を中心に数多くの手術を行ってまいりましたが、更新時期となり、本年8月より最新機種に入れ替え運用を開始しています。現在外科での利用が進んでいますが、さらなる領域での利用を通じて、地域の皆様により良い医療を提供していきたいと思っております。

強度変調放射線治療 (IMRT) は癌に対する放射線治療の手法であり、有害事象を低減すると共に、腫瘍の制御率を上げることができるものです。当院ではIMRT治療が可能な放射線治療装置を新病院開設時に導入していましたが、放射線治療医が2名以上常勤していることという施設基準を満たせず運用できていませんでした。本年4月より以前当院の初期臨床研修医であった放射線科医師が就職したため、施設基準を満たし、9月よりIMRTの運用を開始いたしました。地域がん診療連携拠点病院としてさらなるがん治療の充実を図ってまいります。

本年5月に病院機能評価を受審しました。病院機能評価は病院がガイドラインなどにそった標準

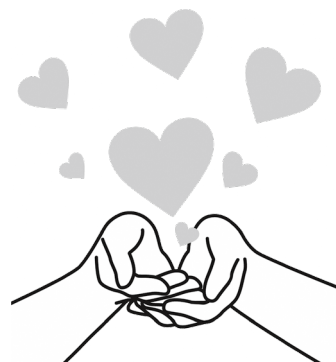
的な医療を行っているかということを評価するものです。病院のルール、診療内容、カルテの記載、衛生環境など、病院の隅々までチェックを受けます。昨年の夏より準備を始め病院全体で様々な整備を行い受審に至りました。審査の結果、予算の関係で導入できていなかったシステム1つと、規約の不備を1つ指摘されましたが、改善案を提示しましたので、合格できるものと思われます。この準備にあたり病院が一つにまとまり作業を行えたことは大きな収穫となりました。

新型コロナウイルス流行後、コロナの補助金打ち切りや患者さんの受診控えなどの影響で、多くの病院で経営状況が悪化しています。当院もご多分に漏れず厳しい状態となっています。このため、救急受け入れの充実、近隣医療機関への集患活動、コストの削減などを行い経営改善に努めてまいり

ます。

当センターの理念の「地域の皆さんに心ある医療を提供します。」を、忙しい医療現場で常に実践するのは容易ではありませんが、研修、現場教育、職場環境の改善などを通じて充実させていきたいと思っています。

病院というものはどんなに設備が充実してもスタッフが充実していなければ何の役にも立ちません。スタッフ相互の連携を強め、お互いに尊敬しあい、充実した医療が行える職場環境を確立し、「心ある医療」の実践を図っていききたいと思います。



看護部長就任のご挨拶

令和6年4月1日より看護部長に就任いたしました。長年にわたり、当院をご支援いただきました地域の皆様に心から感謝を申し上げます。これまで築き上げられてきたことを受け継ぎ、地域医療に貢献できますよう、もとより微力ではございますが皆様のお力添えをいただき、職務に精励する所存でございます。

私は、春日部市が運営する看護学校で教育の恩恵を受け、平成12年に春日部市立病院に就職いたしました。以来25年の間、常に多くの皆様に支えられながら看護とは何かを学び、患者様から

いただく「ありがとう」に励まされながら、看護の仕事に誇りをもって勤しんでまいりました。支える立場となったこれからも、患者様との出会いを大切に、心と耳を傾け寄り添える看護師の育成に努めてまいります。看護部では、地域の皆様が生命を授かったその日から人生の最期の日を迎えるまで、身近な健康管理の伴走者として、日々のケアやサポートに寄り添わせていただけるよう努めております。質の高い医療と良質な看護の提供に取り組み、患者様一人ひとりと丁寧に向き合い、病院のトータルコンセプトにあるように、春



看護部長
笠原 洋子

の陽だまりのように皆様から「選ばれ」「集える」病院を目指し、「心のこもった優しいケア」を看護部理念に掲げ、あたたかく、やさしい、そして思いやりの心を携えた看護の手を育ててまいります。さらに、より良い看護を提供し続けるために、これからも、新たな取り組みに積極的に挑戦していきたいと考えております。

2020年から急激に広がった新型コロナウイルス感染症では、私たち医療従事者は前例のない脅威に直面いたしました。積極的に感染患者様を受け入れ、日々の業務に加え感染リスクと戦いながら患者様の命を守るために全力を尽くし、職員一丸となって困難な局面を乗り越えてまいりました。防護服に身を包み長時間にわたる勤務をこなし、患者様に最善のケアを提供するため、自身や家族の生活を後回しにし、ただ使命感を胸に職務に力を注ぎました。地域の皆様には、ご理解とご協力に加え非常に多くの応援の声を届けていただき、勇気づけられ心強く感じていました。猛威を振るった新型コロナウイルス感染症も、2023年5月に5類感染症に移行したことを期に、世間の認識は一斉に感染対策の緩和へと様変わりしました。院内では、感染症専用ベッドを確保しつつも、段階を踏みながらコロナ専用病棟を閉鎖いたしました。しかし、9月になった現在も感染者の入院は途切れることはありません。そのため、院内では患者様と職員を守るべく、面会の制限など慎重に感染対策の見直しを繰り返し対応してまいりました。現在もクラスターの発生は身近にあり、予断を許さない現状が続いています。また、感染後の後遺症に苦しんでいる患者様も存在し、未だ新型コロナウイルス感染症との対峙は続いております。ですが、そのような中においても、少しずつ

平常を取り戻しております。「藤まつり」での心肺蘇生法講習や「大風マラソン大会」の救護活動も再開することができました。これまでは、感染者対応を優先すべく閉鎖していた緩和病棟も再開することができ、がん拠点病院として緩和ケアチームを中心に心と身体の痛みを和らげ、患者様が自分らしく過ごせるようなケアの提供に努めてまいります。

今年の元旦に発生した能登半島地震では、多くの住民が負傷し避難を余儀なくされました。当院からも、緊急支援として災害支援看護師を被災地に派遣し、災害支援活動に貢献することができました。当院は、埼玉県の大災害時連携病院の指定を受けており、災害発生時には医療救護活動の中心的役割を果たすべく定期的な訓練も行っております。



▲かすかべ商工まつり



▲埼玉県国民保護実動訓練

また、2023年7月には、地域周産期センターの認定を受け、妊娠中や出産後の母体と新生児の健康を守るため、今までよりも専門的な医療提供が行えるようになりました。赤ちゃんのご家族が愛情に満たされた時間を育み、地域の皆様が安心して子育てできる支援提供を志し、これからも努力を続けてまいります。

医療の高度化と専門化が進み、患者様の生活背景や病態が多様化・複雑化する中で日本では、超少子高齢化により、2040年には医療介護ニーズ上昇のピークを迎えると推測されております。労働人口が減少する中で、安全で質の高い医療提供体制の維持と医療従事者の働き方改革の両方が課題とされております。看護師の仕事は深く幅広く、熱意と奉仕の心をもって立ち向かって、心身ともに大きな負担がかかる仕事でもあります。看護

師も心にゆとりをもって患者様に向き合い、安心して生涯にわたり働き続けられるよう、職場環境の整備にも力を入れてまいります。

これからも、地域の皆様の期待に応え「愛され」「選ばれる」病院づくりに尽力してまいります。今後とも、皆様の暖かいご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



▲春日部市災害時医療救護訓練

研修医の ひとりごと



研修医2年
根 岸 青 葉

私は埼玉県に生まれ、春日部市の隣の地区で高校時代を過ごしました。放課後ララガーデン春日部で遊んでいたこともあります。また、春日部は両親が出会い、青春時代を過ごした場所でもあることからとても縁を感じる場所です。大学卒業後、春日部市立医療センターで研修をさせて頂けることが決まり、高校時代と全く同じ経路で通勤することにな

りました。高校生の頃にタイムスリップしたような気分でした。しかし、路線名は東武野田線から東武アーバンパークラインへ変わっており、自分たちが卒業の時にデザインしたリュックを背負って母校へ通う学生たちを見て、月日の流れを明確に感じました。

先日、医師を志す高校生が病院見学に来るイベントがあり、そこで出会った母校の学生と勉強や進路の話、現在の母校の状況や先生の話で盛り上が



りとても温かい気持ちになりました。自分が現在に至るまでの過程や軌跡は必ずどこかで繋がることがあるのだなと改めて感じました。これからも地域や人との繋がりを大切に日々精進して参りたいと思います。

職員の

ひとりごと



栄養科

宮 関 匠 吾

日ごとに寒さがつのり、鍋やおでんなど体の温まる料理がぴったりの時期になりました。この時期、野菜なら白菜や長ネギ、果物はみかんやりんご、魚介類はカニやぶりなど様々な種類の旬の味覚が出回りますが、つつい買ったはいいいけど食べるタイミングを逃して捨ててしまうなんてことはありませんか？今回は少しだけ「食品ロス(フードロス)」について

てお話させていただきます。そもそも食品ロスとは、食べられるのに捨てられている食品のことで、日本では年間500万トン以上の食品ロスが発生しています。そのうち約250万トンが家庭からの廃棄と言われていて、日本人1人あたり毎日お茶碗1杯分くらいの食べ物を捨てている計算になります。食品ロスを減らすためには、買い物時に「買いすぎない」、料理を「作りすぎない」、外食時に「注文しすぎない」そして「食べきる」ことが重要です。食品の期限表示には賞味期限と消費期限がありますが、賞味期限は「美味しく食べられる期限」のことで大幅に期限を過ぎなければ食べることができます。食品ロス削減には一人ひとりの取り組みが大切です。食べ物を大切に意識をもって冬の味覚を満喫してみてください。(参考：消費者庁ホームページ)

編集後記

日が暮れるのが一段と早くなり、朝夕の寒暖差も厳しくなってきました。

個人的に旬の食べ物や紅葉など四季を感じる出来事があるとうれしい気持ちになります。秋は特に、暑い夏を乗り越えて、街中にはこっくりとした食べ物やきれいな景色が増えていき気持ちも穏やかになっていく気がします。冬に向けてゆっくりと準備しながら今の季節ならではのイベントを楽しんで過ごしていきたいものです。

「くすの木」では様々な話題を提供していきます。今回は当院の新体制についてです。地域の皆さまに少しでも当院のことを知っていただくきっかけになればと思います。

令和6年12月

患者支援センター 相談支援担当 榎本 多瑛